

令和6年度
広島平和記念式典中学生派遣事業
報告書



川越市

事業の概要

- 1 目 的 未来を担う若者を被爆地広島へ派遣し、広島平和記念式典への参列、広島平和記念資料館や原爆ドームの見学を通して、平和の尊さ大切さを学ぶことを目的とする。
- 2 日 程 令和6年8月5日（月）から6日（火） 1泊2日
- 3 派遣人数 22名
- 4 選出方法 各市立中学校から校長推薦により生徒1名を選出
- 5 対象学年 第2学年
- 6 説明会 令和6年7月25日（木）午後1時30分から
- 7 平和を考える集い 令和6年8月17日（土）午後1時から
市立博物館 視聴覚ホール
- 8 感想文 報告書として編冊し、派遣生徒及び学校へ配布。
令和7年度の原爆写真展の際に展示。

日 程

【説 明 会】 令和6年7月25日（木）

時 間 午後1時30分～午後3時30分
場 所 市役所7階第1・第5委員会室
内 容 市長あいさつ、自己紹介、事業説明、班別交流

【派遣1日目】 令和6年8月5日（月）

6：20 東武東上線川越駅改札口集合
6：39 川越駅出発
8：48 東京駅出発〔のぞみ63号〕
12：42 広島駅到着
14：30 平和記念公園見学（平和記念公園及び平和記念資料館等）
17：15 平和記念公園出発
17：30 ホテル着

【派遣2日目】 令和6年8月6日（火）

6：50 ホテル出発
7：10 平和記念公園到着 式典受付
8：00 平和記念式典 開会
8：50 平和記念式典 閉会
10：30 広島駅到着 広島駅構内にて自由行動
13：03 広島駅出発〔のぞみ96号〕
16：57 東京駅到着
18：30 川越駅到着 解散

【平和を考える集い】 令和6年8月17日（土）

時 間 午後1時～午後4時
場 所 市立博物館視聴覚ホール
内 容 意見交換会、体験発表、講演

参加者感想文



あたりまえに感謝する

川越第一中学校

私は、地球に住む全員が笑顔で手を取り合い、お互いの個性を認めあえる。そんな世界であってほしいと思っています。ですが、世界では今も戦争によって辛い思いをしている人がいます。本当にこのままでよいのでしょうか。

私は、戦争の悲惨さや、広島を生きた人々の想いを知りたい。そこから平和について考え、学んだことを自分の言葉で発信していきたい。そう思い今回の事業に参加しました。

8月5日、私達が訪れた平和記念公園は、緑がいっぱいで、上を見上げると青々とした空が広がっており、79年前に原爆が落とされたとは到底思えませんでした。

資料館に入った瞬間、周囲が恐ろしいほど静まり返ったのを覚えています。私は、原爆投下の様子を再現した模型を前に、立ち尽くしました。家や学校を表した模型が灰色に染まっていく様子を見ると、心に悲しみが押し寄せてきました。

展示物の中には、男女の見境がなくなるほどのやけどを負った人の写真や、遺体が木の葉のように焼かれていく様子を描いた絵など、残酷な資料の数々が目に飛び込み、私は目を背けたくなりました。しかし、これらは「過去の出来事」で済まされるものではありません。自分ごととして受け止めなければ、未来は変えられない。そう思い、一つ一つを目に焼き付けていきました。

私が最も心に残ったのは、被爆者の方々の写真と言葉を一人ひとり展示した「魂の叫び」というコーナーです。楽しそうな様子の家族写真や、花嫁姿の女性が微笑んでいる写真が、そこにはありました。原爆なんてものがなければ、みんな明日があったのです。当たり前に見える日常が本当はとても儚いものだということを実感しました。

8月6日、私達は炎天下の中、平和祈念式典に参列しました。気温は30℃を優に超え、とても暑い日でした。今までの私だったら、「暑い」と弱音を吐いていたと思います。しかし、原爆による熱線はもっと熱く、苦しかった。この2日間を経て、そう思えるようになっていました。

8時15分、黙祷の際に鳴った平和の鐘は、今まで聴いたどの音よりも美しく響きました。「私達と同じように生きていた人、生きるはずだった人」。ひとりひとりに想いを馳せながら、もう二度と、戦争という悲惨な出来事を起こしてはいけないと強く心に刻みしました。

これからも、今回学んだことをまわりの人たちに伝えていきます。些細なことのように思えても、周囲へと広がっていけば、大きな力になる。このことを、被爆から復興した広島に教わりました。一人一人が平和について考えるだけで、世界は変わります。いつかの地球から戦争がなくなる日まで、自分にできることを続けていきたいです。

広島で学んだこと

初雁中学校

八月五日から六日にかけて広島に行った経験は、戦争について深く考え知る機会となりました。そこには、私が思っていた何倍も悲惨な現実がありました。

広島に着いて最初に、広島平和記念資料館に行きました。資料館には、戦争当時の写真や、原爆が投下された後の様子を描いた絵などが展示されていました。全身に火傷を負い、皮膚が垂れ下がっている被爆者の様子を目にし、言葉を失いました。

資料館を見学した後、平和記念公園内を現地ボランティアの方が案内してくださり、お話をお聞きしました。その方は、お母さんのお腹の中にいた時に被爆をした「胎内被爆者」なのだそうです。原爆が投下された時、落下中心付近は三〇〇〇～四〇〇〇度の高温になったそうです。想像もできないほどの熱さですが、ここではそれが現実にあったのだと知らされました。公園内には「平和の灯」もあります。この火は点火されて以来ずっと燃え続けていて、「核兵器が地球上から無くなるまで燃やし続ける」という思いの象徴になっているのだそうです。この火を早く消せるよう、私たちにできることを考えていかなければならないと感じました。

平和記念式典での、とある小学生の代表児童の言葉が特に印象に残っています。

「願うだけでは平和は訪れません。平和をつくっていくのは私たちです。」

私たちが平和でいられる毎日は、「当たり前」ではないのです。今回学んだ、広島に起こった戦争の悲惨さを、身近な人から伝え、自分にできることをしっかり考え実践していきたいです。少しでも世界の笑顔が増えるよう、願うだけでなく行動することで平和をつくっていききたいです。

平和の灯が消えるまで

富士見中学校

八月五日から六日の二日間、平和の尊さや大切さを学ぶために広島県広島市に行きました。広島市はとてもきれいで美しい街です。大きな建物がいくつも並び、路面電車の走る、原爆が落ちたことが想像つかない豊かで平和なところでした。

平和記念資料館で見た光景は、まさに地獄絵図でした。館内に入った瞬間空気が重くなり、ただならぬ雰囲気を感じました。八時十五分で止まったままの時計やボロボロになり血がついている衣服など、思わず立ちつくしてしまうほど、切なく辛い思いでいっぱいになりました。特に地面から掘り出された大量の人骨の写真は、見ていられないほどのショックを受け、今でもはっきりと覚えています。原爆は、一瞬にして建物や人々の幸せを壊してしまうものなのだと思います。

平和記念式典では、「平和への誓い」の中の「願うだけでは、平和は訪れません。」という部分がとても心に残っています。一人一人が人の話をよく聞くこと、違いを良さと捉え、自分の考えを見直すこと、仲間と協力し、一つのことを成し遂げること。この三つが私達にできる平和への一歩です。今の私達にもできることはたくさんあるのだと気付くことができました。八時十五分、「黙祷」の合図があると、空気がしんと静まり返り、会場全員の思いが一つになりました。

現在、被爆者の平均年齢は八十五歳を超えています。年々平均年齢が高くなっているということは、直接被害者の言葉を聞ける時間がわずかしかないということです。私達は、他の人に伝えていくことはできます。被爆者の思いを途切れさせないために、この二日間で学んだことを周りに伝えていきたいです。そして、世界から核がなくなり、平和の灯が消えるような世の中になってほしいと心から願っています。

平和への行動

野田中学校

1945年8月6日8時15分、一発の原子爆弾によって戦争に関わっていた人、そうでない人、敵、味方関係なくその時、もしくはその後広島へ行った人の人生が一瞬で変わってしまいました。そして今でも苦しんでいる被爆者の方々がいます。

私は8月5～6日の2日間、川越市の代表として広島へ行きました。1日目には、平和記念資料館や平和記念公園などを回り、原爆の恐ろしさを目や耳で体感しました。平和記念資料館の被爆した人、家族が被爆した人の言葉を見ていくと胸が締め付けられ、目をそらしたくなりました。平和記念公園ではボランティアの人が案内してくれました。私たちのボランティアの人は胎内被爆者でした。私は初めて被爆者に会い、お話をしました。わかりやすく原爆のことや公園の記念碑などを教えてくれました。最も印象に残っているのは原爆供養塔です。ボランティアの人が「平和記念公園で一番悲しい場所」と紹介してくれました。中には7万人の遺骨があり、名前がわからないため段ボールに入れられている遺骨もあります。家族に見つけてもらえずに79年間この中で眠っている人が沢山います。そして家族が見つからずに毎年8月6日にここで祈っている人達もいます。そんな人達の悲しみが集まっている場所なのだと思います、二度とこのようなことを起こさせませんと思いながら黙祷しました。

2日目は平和記念式典に参加しました。どのように平和な世の中をつくっていけばよいかを代表の方々のスピーチを聞いて考えました。中でも印象に残ったのは「願うだけでは平和は訪れません」という言葉です。私は今までニュースなどで戦争の話を聞いたときも終わるといいなと思うだけでした。私が行動しても戦争は終わらないと決めつけていたからです。私の失敗に気づけた瞬間でした。スピーチの中では人の話をしっかり聞くことも平和への第一歩だと言っていました。これなら私にもすぐに実行できます。平和はこうした小さな積み重ねの上に成り立っているのだと改めて身が引き締まる思いでした。最近では平和記念式典をテレビで見していない人や、広島へ行ったことがあっても平和記念資料館に入ったことがない人が多いと思います。私が平和へできることはそのような人に少しでも私が学んだことを伝えていくことだと思いました。この経験が無駄にしないよう沢山の人に伝えたいです。

8月6日 広島平和記念式典に参加して

城南中学校

今回、川越市の代表として派遣事業を通して、核兵器の恐ろしさや悲惨さ、平和の大切さを学びました。

初日には、平和記念資料館に行き、原爆が落とされる前の広島や原爆が落とされた場所から離れている人が見た立ちのぼる雲などの写真や絵を見ました。中でも、被爆した人は全身をやけどしている人や目を治療している人、放射能による黒い「死の斑点」が出ている人や「黒い雨」を飲む人などがいて印象に残っています。あらためて原爆の恐ろしさを知り、見ることもためらいたくなるような悲惨さを実感しました。「魂の叫び」では本当に声が聞こえてくるようで涙が出そうになりました。二度とあってはならないと強く思いました。原爆ドームは資料館の写真のようにそのまま残されていました。写真よりも大きく力強く原爆の恐ろしさや戦争の愚かさを語っているようでした。また、被爆者やその遺族だけでなく子どもも誰もが平和を願っているのだと知りました。

2日目には、広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式に参列させていただきました。私は「願うだけでは平和は訪れません」という子ども代表の言葉に一番考えさせられました。普段の学校生活でもそうです。クラスや学年を見て、何かを良くしたい、変えたいと思うだけでは、何も変わりません。思うだけでなく、行動に移してみたいと思いました。式典に参加することで、改めて戦争の恐ろしさを私達派遣生徒たちは知ることができました。しかし、式典に参加した私達だけでは戦争を止められるほどの力はありません。では、何ができるのか考えたときに「戦争は決してしてはいけない」ということをこの式典に参加した私達が語って、広げていかなければいけないのだと使命感を感じました。同時に、困っている誰かのために力になりたいとも強く思うようになりました。そして「思う、願うだけでなく」身近なボランティア活動などから行動してみたいと思います。

平和、命の大切さ

芳野中学校

わたしは今回の中学生派遣事業へ参加して、たくさん気づかされたことがありました。

その中でも特に、戦争の悲惨さについてはたくさんのことを考えることができました。私の身内で被爆者はいないことや、自分自身が戦争を経験したことがないため広島へ行くまで戦争の悲惨さは教科書やテレビなどのメディアでしか戦争の悲惨さを感じることはできませんでした。だから広島平和記念資料館で見学してあまり知らないわたしたちでも分かるように色々な被爆者の遺品や被爆の惨状を示す写真や絵などの資料が展示してあるのを見て、昭和二十年八月六日午前八時十五分にどのような出来事があったかしっかり理解できて、たくさんの思いが伝わってきました。

広島記念資料館を周った後、ガイドさんが平和記念公園を案内してくださいました。そのときにガイドさんが話していた話で驚いたことがありました。

「原爆の子の像の後ろにある千羽鶴はなにかに再利用されます。それはみなさんももらうものです。…正解は卒業証書です。」

わたしは、その話を聞くまでは原爆の子の像の後ろの千羽鶴があるんだとしか思っていなかったのですが、ガイドさんの話を聞き、来年わたしも卒業するけど千羽鶴の卒業証書があるなら先生に話してみたいと思いました。

この派遣事業を通して私の心に強く残ったのが、「想像するだけじゃ駄目」ということです。

学校の授業で人権作文や標語を書くことがあります。それに、歴史の授業で戦争の勉強もしますが、行く前に想像していた場所と実際に自分の目で見て耳で聞いて肌で感じるものとは全然違いました。資料館で見た資料は思っていた以上に残酷で、原爆ドームは大きく、中は丸見えでした。平和記念公園にある慰霊碑にはこう書いてありました。「安らかにお眠り下さい あやまちを繰り返させぬから」と。これは平和への誓いです。わたしたちはこれを守り、受け継いでいかないといけないと思います。

今回、参加させてもらった広島原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式は毎年死者が増えていって、今も原爆の後遺症で苦しんでいたり、悩んでいたりする人がいるそうです。

わたしは、その人達に直接会いお話をすることはできません。ですが、できることがない訳ではないということは平和祈念式典へ参加し、理解しました。わたしは、必ず次の世代へ受け継ぎます。

平和に

東中学校

私は広島への二日間の派遣事業に参加しました。その二日間で私は、広島と長崎に原子爆弾が落とされた悲劇から平和の大切さや尊さを学びました。

主な活動としては、一日目には広島平和記念資料館に行き、その後平和記念公園を見学しました。そして二日目には広島市原爆死没者慰霊式並びに平和記念式典に参列しました。私はこの派遣事業で感じたこと、思ったことがあります。

一つ目は、原子爆弾が落とされた当時のことについてです。原子爆弾が落とされたのは、8月6日の午前八時十五分。なんの前触れもなく、突然広島の街に落とされました。これは事前学習で調べたことです。このように調べれば沢山当時の様子を知ることができますが、それを身近に感じることは難しいと思います。しかし、実際に資料館に行くと、当時の様子や人々の悲しみや思いが見えました。どれほどの範囲で被害がでたのか、どれほどの命が失われたのか。被害にあった方たちは、何に苦しみ続けているのか、これからの何に希望を持ったのか。そして、そのすべてが一つの爆弾によって起こったということ。尊い命が、この一瞬にして奪われてしまったこと。そこで見た光景を私は忘れられません。

二つ目は、今の世界と平和についてです。世界では、今も戦争が起こっているところがあります。戦争をすること、核兵器を使うことで何が得られるのでしょうか。そのせいでこれからも生きていくはずだった多くの命が無差別に奪われているわけで、自分の愛する人たち、大切な人たちが奪われてしまうなんて、私はとても耐えられません。平和記念公園にある平和の灯がついている限り、世界の平和は訪れない。そして今日も、今も平和の灯は灯されていて、平和への希望が踏みにじられているのです。

平和とは、世界や私たちがどうすることで訪れるのでしょうか。世界につなげるためには、その中にいる私たち一人ひとりの意識や協力が必要です。この悲劇のことをまだ知らないという人たちは、広島に足を運び、自分の体や心で感じ考える。被爆者の方々に話を聞く。そして共有したことを次世代に伝えていくことが大切です。私たちがやるべきことは何なのかを今一度よく考え、小さなことでも行動に移してみることも必要だと思います。この世界にたくさんの命があるように、たくさんの考えがあります。この思いが一つになったとき、平和がやってくると思います。だから、お互いのことを知ろうと努力し受けとめることが大切なのではないでしょうか。平和を実現することは難しいと思いますが、被害にあった方々の思いにふれ、あるべき世界について考えていきたいと思っています。

平和について学んだこと

南古谷中学校

私が広島平和記念式典中学生派遣事業に参加した理由から話していきます。私は社会の授業で戦争について学び、その時に広島原爆について学習する機会がありました。しかし、あまり学習を深めることができませんでした。一度は、広島原爆について、調べてみようと思ったのですが、怖くて深くは調べられませんでした。それから2年後、先生にこの事業に参加してみないかと誘われ、私が生まれる前のことで、知らない土地のことではありますが、遠い地の昔の話と考えず、この機会に広島であったこととしっかり向き合おうと思いました。

次にこの事業に参加して学んだことを書きたいと思います。まず1つ目として、平和の大切さについて学びました。原爆の資料館では、戦争の悲惨さについて知ることができました。焦げた弁当もありました。原爆が落とされた後に助けに来てくれた人まで被害に会い、苦しんでいました。その一つの爆弾で沢山の命を奪っていったのです。今私は平和に暮らすことができますが、いつ争いが始まるかわかりません。平和であることは当たり前ではなく、1日1日を大切に生きていきたいと思うようになりました。

2つ目として、人々の団結力について学びました。広島に原爆が落とされてからおよそ80年が経ちました。私が見せてもらった、原爆が落とされた直後の写真を見ると、昔の広島とは考えられないほど悲惨な状況でした。まだ80年ほどしか経っていないのに今ではしっかり整備されていて驚きました。

私はこの事業に参加して、皆さんに伝えたいことがあります。まずは過去にあったこととしっかり向き合ってしっかり考えてほしいです。なんの罪もない人たちの命を無差別に奪っていった爆弾について知り、二度と繰り返さないようにしっかり考えるところから始めてほしいです。また、自分だけではなく、他の人とも共有していけると良いと思います。

広島で学んだこと

高階中学校

私は、今回の広島派遣学習で、1945年8月6日の出来事を深く知ることができました。日常では学べないことがたくさんあり、たいへん貴重な体験となりました。

一日目は平和記念資料館の見学、平和記念公園の散策をしました。平和記念資料館では、当時の様子の写真や絵、実際に被爆した方々の持ち物、言葉などが展示されていました。その中でも強く心に残ったことがあります。それは、「シャッターを切るのを20分ためらった」という写真を撮影した人の言葉です。それほどまでにその情景は辛く悲しい、地獄のような状況だったと想像できます。

また、被爆前の広島と被爆後の広島を比較できる写真がありました。同じ景色とは思えないほどに変化していました。この写真を見たことで被害の大きさを改めて認識しました。来館者の中には、海外の方も多くいました。国籍問わず、原爆に関心をもっている人が多いことを感じました。

平和記念公園の散策では、テレビで見たことがあるものが多く、その中でも原爆ドームが特に心に残りました。被爆した建物がまだ実際に残っていることに驚いたのと同時に、その当時の悲惨さを深く感じました。さらに、平和記念公園の地面は、当時の地面をそのまま埋め立ててつくられたもので、地面を掘ると、当時の生活の様子が出てくるということを知りました。本当に自分がいるこの場所に、原爆が落とされたのだと実感しました。

二日目は、平和記念式典に出席しました。平和記念式典の来場者にも海外の方が多く、世界的に注目を集めていることを再認識しました。ひろしま平和の歌を聞いて、平和の尊さを深く感じました。

二日間の体験を通して、原爆の悲惨さと同時に平和の大切さを知りました。平和というのは簡単には訪れません。現在も戦争が起きてしまっている国もあります。平和を保っていくことはとても難しいことです。それを解決するには、世界全体でこの問題に取り組む必要があると思います。1945年8月6日に起きた出来事をより多くの人を知ることが、目には見えない平和というゴールへの小さな一歩だと考えます。そのために、今回私が体験を通して感じたことを、より多くの人に伝えていきたいです。

平和への架け橋

高階西中学校

1945年8月6日午前8時15分、原子爆弾が広島街へ落とされました。

私は8月5日、6日に中学生派遣事業として広島県へ行き、2日間で平和記念資料館と平和記念公園の見学、そして広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式に参列しました。

平和記念資料館では、原爆投下直後の様子や全身にやけどを負った人の姿が写真に残されていました。また、亡くなった方の遺品として、手紙やボロボロになってしまったシャツ、身分証明書等が当時のままの状態で見せていました。私はそれらの様々な展示品を見て、原爆によって広島がどれだけ悲惨な状況だったのかをすぐに想像することができ、とても胸が痛みました。現在の広島風景を見るだけでは、この原爆の恐ろしさを感じることができないと思いました。

平和記念公園の原爆ドームはガラスがすべて割れ、建物の半分だけが当時のまま残されており、その姿を通して当時の人々が感じた苦しみを伝えているように思えました。また、ボランティアの方の話の中で、「平和の灯は核兵器が地球上から姿を消す日まで燃え続ける」という言葉がありました。広島街は原子爆弾1つで一瞬にして壊され、なんの前触れもなく悲劇が訪れました。そして、今も地球上のどこかで核兵器によって苦しんでいる人がいるということを学び、私が何不自由なく暮らせている生活は当たり前ではないのだと強く実感しました。

平和祈念式では、小学生の「願うだけでは、平和は訪れない」という平和への誓いの一言に感銘を受けました。その言葉を受け、私も願うだけでなく、実際に行動に移していくことが大切だと感じました。

今回、2日間広島に行く機会をいただき多くのことを学ぶことができました。実際に見られたことで得たものがたくさんありました。この貴重な経験を活かして少しでも多くの人に平和の大切さや命の尊さを伝えていきたいです。また、今の私ができることに一つ一つ取り組んでいきたいです。

広島から、日本の未来へ

寺尾中学校

” 1945 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分、広島に原爆が落とされた。”

この事実の裏側を学ぶために、私は川越市広島平和記念式典事業に参加しました。この派遣事業に参加して学んだことを 3 つ紹介します。

1 日目。朝から暑かった 8 月 5 日、広島へ向かいました。1 日目に学んだことは 2 つあります。

まず 1 つ目は、戦争の悲惨な情景です。平和記念資料館の見学で、戦争に関する数々の写真や展示物を目にしました。記録用に写真を撮ろうとしていましたが、想像をはるかに超えるあまりの衝撃に写真を撮ることさえできませんでした。これが写真だけの物語ではなく、現実起こったものだ考えると胸が締め付けられる思いでした。

2 つ目は、平和記念公園についてです。平和記念資料館の見学のあと、平和記念公園の見学をしました。見学の最初にガイドの方のお話で、「この公園の下には、当時の人々が住んでいた跡がある」と教えていただき、私はその大地を 1 歩 1 歩踏みしめて歩きました。途中で平和の灯が力強く燃えている様を見て、核根絶へ向けた強い意志を感じられました。

2 日目。ホテルではなかなか寝付けず 3 時半に始まった 8 月 6 日。2 日目にも学ぶことができました。

3 つ目は、広島だけでなく日本が戦争を次の時代へ語り継ぎ、一体となって戦争の悲劇を繰り返さないように動いていることを学びました。岸田内閣総理大臣や広島市長などの話の中には、「戦争を二度と繰り返さない」という言葉と「核兵器廃絶へ向けて取り組む」という言葉がありました。その言葉から私は、「今後も広島のような被爆地を産まないために動いているんだ」と感じました。

自分は家に帰ってから、「平和」とは何なのだろうか、と考えました。その時私は気づきました。「平和」はすぐそこにあるものなのだ、ということです。今回の派遣事業でも、ホテルの食事などのみんなが笑顔でいる時間や、この派遣事業自体が楽しく「平和」であった、と考えたのです。私達が平和に向けてできること。それは、普段の暮らしから平和を作ること。これが、広島に行って導き出した私の平和への考えです。今回の派遣事業を通して感じたこれらのことを大切に、これからの人生を歩んでいこうと思いました。

平和をつくるために私たちができること

砂中学校

「願うだけでは平和は訪れません。平和を作っていくのは私たちです。」

これは広島平和記念式典での子ども代表による平和への誓いの言葉です。

1945 年、広島・長崎に原子爆弾が投下され、街が一瞬にして破壊されました。子どもを一生懸命探す親、水を求め川に飛び込み溺れている人々、体がドロドロになり苦しんでいる人の様子が、平和記念資料館に展示されていました。見ているだけで辛かったです。

その中には無事に家族のもとに帰ることができた人もいました。しかし、生き延びた人が急に発病することが増えてきました。この原因となったのが「放射線」です。放射線は、少量であれば傷がすぐに修復されますが、大量に浴びると、傷の修復が追いつかず、細胞が分裂できず死に至ったり、がん化します。そのため、爆発に耐え抜いたあとでも、このようなことが起きるのです。また、今でも放射線の後遺症に苦しんでいる人がいます。原子爆弾は、心身ともに永遠に傷を残す残酷な兵器です。私はこの事実を知り、戦争は繰り返してはならないと強く感じました。そして、自分が行った広島で、現実には起こったことだと実感し、恐ろしさや平和の尊さを改めて感じました。戦争をするとこのような状況を生むということを、私たち一人一人が想像し、二度と起こさないよう、話し合うことが大切だと思いました。

今日からできることとして、今回学んだことを言葉や形にして、自分の周りの人に伝えたり、話し合ったりしていきたいと思います。まずはそのスタートとして、学校の集会で戦争の悲惨さ、平和の尊さなどをしっかりと伝えます。そして、平和の尊さに改めて気付いた一人一人が、お互いの考え方や立場の違いを否定しないで、受け入れることができれば、平和が守られていくのだと考えます。

平和への祈り

福原中学校

1945年8月6日午前8時15分に人類史上初めて、広島市に原子爆弾が投下されました。それから80年が経ち、私は広島へ行きました。平和記念資料館に行き、平和祈念式に参加し、平和についてたくさん、そして深く考えることができました。その中で、私がとても心に残っていることが3つあります。

1つ目は、平和記念資料館に行ったことです。そこには79年前当時の服や自転車、手紙や全身火傷をしていたり、助けを呼んでいる写真や絵などたくさん飾られていました。私はそれらを見て言葉が出なくなるほど苦しく辛くなりました。テレビなどだけではあまり深く考えたりすることが出来なかったから、実際に行き、平和の大切さだけでなく、その当時の原爆の苦しさや辛さについて知り、触れることができ、すごく心に残りました。

2つ目は、平和記念公園内に色鮮やかな折り鶴が飾られていたことです。折り鶴は日本の伝統的な文化である「折り紙」の一つですが、広島平和記念公園では平和のシンボルと考えられています。今では、年間約1000万羽、重さにして約10トンにもものぼります。私はその折り鶴を見て、世界の色々な人が平和について考え、その折り鶴一つ一つにその想いが込められているような気がして、私はとても感動し、私自身も折り鶴を折って持っていきたいなと思いました。

3つ目は、広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式に参加したことです。原爆が落とされた午前8時15分には亡くなった人たちのためにみんなで祈りました。また、平和への誓いでは、小学生の2人が話しており、その中の「願うだけでは、平和は訪れません。色鮮やかな日常を守り、平和を作っていくのは私たちです。」という言葉に心を打たれました。これからの生活で私たちみんなで平和を作っていきたい。私自身のできることは少ないのかもしれませんが、少しでも平和について考え、まずは目の前の相手の気持ちを考え、自分の日常を過ごすことから大切にし、平和を感じられる日々にしたいなと思います。

私が感じた、当時の苦しさや辛さ、平和の大切さ、命の尊さを、これから色々な人に伝えていきたいです。そして色々な人と深く、平和について考えていきたいなと思いました。

より良い世界のために

大東中学校

私が今回の派遣事業への参加を希望した理由は、日本という核兵器の被爆国があるにも関わらず、ロシアが核兵器でウクライナを脅し続けているというニュースを目にし、今一度、原爆によってどのような被害を受けるのか自分の目で見てみたいと思ったからです。

派遣事業を通して学んだことは二つあります。

一つ目は、核のおそろしさです。一日目に、平和記念公園内にある広島平和記念資料館へ見学に行きました。ここに展示してある写真や、被爆者が描いた絵はどれも生々しいものでした。また、遺書や焼けた服、被爆者の訴え、被爆数分前に使っていたかもしれない弁当箱や三輪車からは、彼らの恐怖が見てとれました。僕が今生きていることは決して当たり前ではないことを自覚して、平和の尊さ大切さを忘れずにいたいと思います。

二つ目は、戦争をしている人々がなぜいつまでも同じ過ちをするかについてです。平和記念公園で説明をしてくださった方の話によると、早く日本を降伏させたかったアメリカは、日本に脅威を見せつけるため核兵器を使ったそうです。広島が選ばれた理由は、山に囲まれているため被害が少ないからだそうです。今の核兵器は昔より被害が広がるように作られているため、想像できないほどの死者数となるでしょう。その後の街の復興も難しくなるのはもちろんのこと、環境にも甚大な被害を出してしまいます。

今、様々な国が核兵器を持ち世界の脅威となっています。被爆国の経験を活かさなければ良い未来が訪れることはないでしょう。被爆国である日本は、世界に自分たちの経験を発信し、核兵器保有国がそれに応えて核兵器を捨てることで、誰もが核兵器におびえない平和な世界になれば良いなと考えます。

広島平和記念式典に参加して

大東西中学校

私は今まで平和の大切さについて深く考えたことがなく、今の生活は当たり前だと思っていました。しかし、平和式典に参加して戦争の悲惨さや平和の大切さを学んだことで、平和だからこそ今の幸せがあるということがわかりました。

資料館で、原爆が投下された瞬間の再現映像を見ました。建物や緑にあふれる広島でしたが、原爆が投下されると一瞬にして灰色になってしまいました。投下されてから一瞬で爆発したので、逃げることも隠れることもできないと思いました。そして、爆心地に住んでいた人たちは原爆の光を見てどう感じたのか、そもそも光を見ていたのかわかりませんが、とても苦しい思いをしていたことがわかりました。テレビや授業で聞いた話だけでは、どのように原爆が投下されたのか想像することしかできませんでした。しかし、実際に映像を見たことでどのように原爆が投下されたかだけでなく、爆発した時やその後の広島の様子まで見て理解することができました。

式典では、8時15分に黙祷をしました。ちょうど79年前にこの場所に原爆が投下されたと考えるととても怖く、今落ちてきたらどうしようと不安になりました。広島の小学生の平和への誓いを聞いて、「願うだけでは平和はおとずれません。」という言葉が印象に残りました。今までは大人が戦争しなければ平和であると思い、平和を願うだけでした。しかし、相手の話をよく聞くことや、協力して一つのことを成し遂げることも平和につながる一つのきっかけになるとわかりました。

今の日本は、平和があるからこそ友達と遊べておいしいご飯が食べられます。79年前は当たり前ではなかったこの幸せに感謝して、これからも守っていきたいです。そのために、自分の周りから小さな平和をつくって、この平和の輪を広げていきたいです。

被爆国の一人として

霞ヶ関中学校

昭和二十年(一九四五年)八月六日、午前八時十五分。広島県広島市に人類史上初めて原子爆弾が投下されました。原子爆弾は、投下から四十三秒後、地上六百メートルの上空で閃光を放ち、炸裂しました。

私は、原子爆弾が一体どのようなものであり、どれだけの被害を出したのか詳しくは知りませんでした。しかし、今回広島市を訪れ、原爆資料館を見学したとき、あまりの凄惨さに私は息を呑みました。熱線により焼け爛れた肌、爆発、爆風により原型を留めていない町、熱線、爆発、爆風からは逃れたものの、放射線によって苦しむ人々。まさに地獄そのものでした。私は、これほど惨い光景を見たことはありませんでした。たった一発の爆弾でここまで町は壊滅してしまうのか、人間はこんな姿になってしまうのか。私の目の前に広がっていた原子爆弾の爪痕はどれも信じがたいものでした。原子爆弾により苦しむ人々の写真や絵を見るたびに、心が痛み、酷く締め付けられました。服や自転車、時計だけではなく、遺書までも資料館には展示されていました。大切な人を亡くし、遺留品を目にした人々は一体どれだけ悲しみ、苦しんだのか。私には、計り知れませんでした。家族や友人を失うことはもちろん辛く苦しいことですが、それが戦争によるものだったら、はたまた原子爆弾によって見るに堪えない姿になっていたとしたら。原子爆弾は、亡くなった人やケガを負った人だけでなく、生き残った人も苦しめ続けるのです。

資料館の見学後、私たちは平和記念公園を見学するため、外へ出ました。私はそのときの、当たり前の光景が今までよりもずっと美しく見えました。黒い雨が降ることもない快晴の空。その空に浮かぶのは朱色のきのこ雲ではなく、いつも通りの白い雲でした。人々も原子爆弾が投下される前と同じように明るい笑顔に満ち満ちていました。私はこの普段の当たり前の日常こそが平和そのものなのだと感じました。

今も世界では戦争が続いており、平和を望む人々の願いは、ことごとく踏みにじられています。中には、核を使って敵対国を脅す国もあります。原子爆弾は二度と使ってはならない史上最悪の非人道兵器です。核兵器の残忍さを広め、核兵器のない世界を作るためには、一人一人が平和や命について考え、真剣に向き合うことが大切です。その第一歩を踏み出すことこそ、世界唯一の被爆国、日本に生まれた私たちの使命ではないでしょうか。

広島平和式典派遣事業を終えて

霞ヶ関東中学校

私は広島平和式典中学生派遣事業の川越市立霞ヶ関東中学校代表として、8月5日と6日に広島県広島市に行きました。この事業の目的は未来を担う若者を被爆地広島へ派遣し、広島平和式典への参列、広島平和記念ドームの見学などを通して、平和の尊さや大切さを学ぶことです。それを踏まえて、現地の人たちと関わり、戦争で起こってしまった被害や戦争の悲惨さ、当時の様子、平和の大切さ等をしっかりと学び、たくさんの人達に伝えていくことを目的に臨みました。

8月5日の朝6時に集合し、まだ1度しかあったことのない仲間と活動する不安と緊張がありましたが、新幹線の中で会話をすることやカードゲームをしていく中で、徐々に緊張がほぐれ、本来の自分を出せるようになっていきました。

午後に広島市に着きました。自然が溢れ、活気のある街だなと感じました。初めての地だったので、とてもワクワクしました。午後は平和記念公園及び平和記念資料館を見学しました。平和記念資料館には当時被爆された人たちの火傷の写真や紫色の湿疹の絵などが展示されており、このようなことが約100年という短い期間内に、私たちが住んでいる日本で起きたということに衝撃を受けました。また、被害にあわれた方の写真を見て、とても同じ人間の体とは思えないほどの傷で、人間の体はこんなにもなってしまうのかと恐怖を覚えました。今でも鮮明に覚えているほどです。その後は平和記念公園を周りました。原爆ドームなどは当時の雰囲気が残っており、被害の大きさを体感できました。原爆の子の像のあたりには多くの千羽鶴が飾られてあり、たくさんの人が広島原爆で被害にあわれた方々を思いやる気持ちが伝わりました。

6日は朝早くから式典がありました。総理大臣や海外からの来賓の方々も参列しており、挨拶をしていました。8月6日という日や被爆国ということが我が国にとって、とても大事なことだということをその場にいて実感しました。話を聞くだけでシャワーを浴びたみたいに汗が出るほど暑かった中でしたが、厳粛な雰囲気を味わえたことがとても貴重な体験でした。

平和記念公園には被害にあわれた方のお墓がたくさんありました。私はこの事業に参加して、1番強く思ったことは、戦争が起き、1つの原爆でこれほど多くの尊い命が犠牲になることです。現在当たり前のように家族との時間や学校での時間など楽しく過ごせています。それはこのような歴史の上であるものであるということ、そして持続させていかなければならないということ学びました。私がこの事業で学んだことを、多くの人達と共有することで、参加した意義があると思っています。このような貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。

平和の尊さ

霞ヶ関西中学校

1945年8月6日8時15分、広島に1発の原子爆弾が落とされました。その原子爆弾は、無差別に14万人の命を奪い、生き残った人の人生をも変えてしまいました。そのときの広島は、まさに「地獄」であったそうです。私は実際に広島市にある広島平和記念資料館に行き、当時起きたことについて目で見て、耳で聞いてきました。そこでは、想像とは比べものにならない原子爆弾の恐ろしさについて知りました。原子爆弾の被害は甚大であったそうです。また、直接的に被害に合わなかった人でも、後に放射線の影響で白血病などにかかり死んでしまうということに、言葉を失ってしまいました。

平和記念公園では、映像でしか見たことがなかった原爆ドームの実物を、初めて見ることができました。ここでは、原子爆弾がなぜここ広島に落とされたのか、なぜ倒壊を免れたのか、ガイドさんに教えてもらうことができました。そして、2歳で被爆し、9歳で白血病を患い、病気の回復を願い千羽以上の鶴を折った佐々木禎子さんの死をきっかけに建設された「原爆の子の像」や「原爆死没者慰霊碑」の前に立ち、このようなことは絶対にあってはならないことだと深く感じました。

広島市平和式典では、過去最多となる115ヶ国もの国が出席し、そして5万人が平和を祈るため参列しました。

原爆が落とされた「8時15分」私たちは1分間の黙祷をしました。その黙祷の中で、「未来に原子爆弾の危険性を伝え二度と原子爆弾による被害者を出しません」と心の中で深く誓いました。

私は、この広島市平和記念式典中学生派遣事業に参加し、79年前の8月6日に起きた広島市への原子爆弾投下について考えることで、「平和の尊さ、大切さ」を再認識することができました。これから先、原爆死没者慰霊碑に刻まれている「安らかに眠ってください過ちは繰り返しませぬから」という言葉を胸にきざみ、当時起きたことを伝え、自分たちの力で平和な世界を築いていきたいです。

今生きている幸せ

川越西中学校

皆さんは今生きていることが幸せだと感じたことはありますか。私は何も不自由なく安全に過ごせていることは当たり前と思っていました。ですが、広島平和記念式典中学生派遣事業を通して今生きていることは当たり前ではなく、幸せなのだと感じました。この広島平和式典中学生派遣事業の中で特に生きていることが幸せだと感じたところは、平和記念資料館と広島市民原爆死没者慰霊式並びに平和記念式に参列したことです。平和記念資料館では、写真や絵、被爆者の持ち物などから戦争の恐ろしさ、怖さを知りました。ボロボロに焦げた制服、焼かれ真っ黒になり灰となったお弁当箱。顔がむくれ、人の顔かもわからないくらい皮膚が垂れ下がった子どもの写真はとても悲惨で目を逸らしてしまうほどでした。戦争を経験したことのない私でもその恐ろしさを痛感しました。

広島市原爆死没者慰霊式並びに平和記念式の参列では、子ども代表の言葉がとても印象に残りました。それは、「願うだけでは平和は訪れません。色鮮やかな日常を守り、平和をつくっていくのは私たちです。」という言葉です。願っているだけでは何もしないことと同じ。まだ中学生だから今から行動しても何も役には立たない、そう感じてしまうことがあるかもしれませんが、今からでも今の私たちでもやれることがあると考えることが言葉でした。

私はこの広島平和記念式典中学生派遣事業を通して、前よりも平和や戦争などのフレーズがよく目に入るようになりました。広島に行くまでは生きていることの幸せを感じたことはあまりなかったけれど、当たり前にならざるを得ないことが本当はとても幸せだったと気づきました。ですが私だけがこの気持ちではいけない、沢山の人が平和に向かっていかないと世界平和は訪れないと思います。そのために私は学校で派遣事業の経験を話し、みんなに知ってもらい、今生きていることの幸せを感じてほしいです。

「平和」へのはじめの一步

名細中学校

1945年8月6日午前8時15分。爆風と熱線を浴び、にぎやかだったヒロシマの街は一瞬として黒い灰に埋もれ静けさに覆われた。

私は今回の派遣事業で平和の大切さを、目で見て、耳で聞いて、肌で感じたいと思い参加した。

ヒロシマでの初日は平和記念公園を訪れた。

平和記念資料館に入り、一番最初に見た写真は被爆前のヒロシマの学生たちの集合写真だ。笑顔が溢れ、輝いている。本当にヒロシマに原爆が落とされたのだろうか。

前に進むと世界は一変した。

私はさっきまで出ていた声が自然に止まった。モノクロの写真でも原爆の悲惨さを物語っていた。

資料館で最も印象に残ったところは「黒い雨」の絵が書いてあるところだ。私は原爆が落ちたその瞬間にだけ死者がでるのだと思っていた。しかし、原爆はヒロシマの街に落とされた後も恐怖で襲った。

黒い雨とは、重油のような粘り気のある雨で、放射性降下物の一種だ。この放射能を含んだ雨を飲んだことにより命が助かった者も被爆してから何年後かに白血病などを起こし亡くなったりした。原爆は一度落としただけで一生襲いかかってくると思うと怖くなった。

8月6日の平和記念式典。

平和を望む人が世界中から集まっていた。今までテレビで見ていた雰囲気とは違い臨場感があり、黙祷の一分間は長く感じられた。平和記念資料館で見た1945年8月6日8時15分の光景、被爆者一人ひとりの言葉や顔が蘇った。

世界には数え切れないくらいの争いが起こり、約12,512の核が残っている。皆さんはそれを知っているだけで現実の世界から目をそらしているのではないだろうか。私は今回の派遣事業で戦争・原爆について知っているだけではなく、身近な人に伝えるということの大切さに気付いた。

私は世界中の人々が戦争・原爆について知っているという領域から、伝えるという領域に一步踏み出してほしいと思う。

私自身も今回のヒロシマで知れた知識を身近な人に伝え、その人がまた他の人に伝えて平和の輪を世界中に広げていきたいと思う。

最後に、みなさん一人ひとりの「はじめの一步」で戦争・原爆がなくなり、世界が平和になる日が一日でも早く来ることを願っている。

平和の尊さを学んで

鯨井中学校

現在も世界で戦争が起こっていますが、みなさんは、「戦争」という言葉を聞くとどのようなことを思い浮かべますか。私は、戦争や平和について、あまり学習を深めて来なかったこともあり、広島を訪れる前に「戦争」という言葉を聞くと、戦争に行く兵士の姿や原子爆弾のことを思い浮かべていました。しかし、実際に広島を訪れてみて、改めて考え直すこととなりました。

八月五日・六日に私は、中学生派遣事業で広島を訪れました。今回の派遣事業では主に、平和記念資料館と平和記念公園に行き、平和記念式典に出席することでした。

1日目は、平和記念資料館と平和記念公園に行きました。資料館では、「戦争」をしていた当時の様子が多くの写真や絵などで詳しく知ることが出来ました。資料館を見学して、私が特に印象に残ったことは、二つあります。一つ目は、原爆が落とされた広島の町の様子を撮影した写真です。この写真をみて、原爆の恐ろしさがとてもわかりました。爆心地付近の建物は、骨組みのみを残し、焼け野原となっていました。日常にあるべき物が消えてしまっておりまして。原爆による炎の激しさが感じ取れました。二つ目は、原爆によって、身体中の皮膚がただれてしまった男性の写真です。激痛に襲われていたと思います。原爆は、人の身体だけでなく、人の心にも傷を残したことと思います。

平和記念公園では、ガイドさんのお話を聞きながら原爆ドームなどを見学しました。原爆の子の像のまわりには、たくさんの折り鶴が捧げられていました。この原爆の子は、佐々木禎子さんといい、二才の時に、被爆したそうです。白血病と闘いながら、鶴を折っていて、当時の被爆した方々に勇気を与えていました。その後、みんなで平和の鐘の音を世界へ広く響き渡らせる目的があり、自分の心にも、とても響きました。

平和記念式典には、外国の方々も多く参列されていて、自分も気が引き締まる思いで式典に臨みました。八時十五分の黙とうでは、原爆で亡くなられた方々へ「戦争はもう二度と起こしません。」という気持ちを込めて思いを届けました。

今回の派遣事業では、たくさんのことを学ぶことが出来ました。原爆投下から七十九年経った現在では、「戦争」や「平和」について、考えさせられたり、学ぶ機会が薄れてきておりますが、私たちは、戦争の悲惨さや平和の尊さをもっと理解していく必要があると感じました。原爆被爆者の平均年齢は八十歳を超え、当時の様子を伝える人も少なくなってきました。ですので、次は、私たちが、過去の過ちを二度と起こさないよう後世に伝えていかなければならないと考えています。

平和へ向かって

山田中学校

「平和」とは一体なんなのか？私はこのことについて考えながら、今回の広島平和記念式典中学生派遣事業に参加しました。

七十九年前の八月六日午前八時十五分に広島に原爆が落とされ、約十四万人もの方々が亡くなりました。平和記念資料館で当時の様子を見学してきましたが、想像していたものより悲惨なものばかりで、言葉を失いました。ボロボロの衣服、高熱によって溶けた建物、人影のあとのついた石、特に紫や青色などに変色した死体の絵などはとても恐ろしくて心に残っています。それに、原爆を落とされたときに生き残っていても、火傷や後遺症で長い間苦しんでいる方々が今もいらっしやると思うと、とても悲しくなりました。

平和祈念式典での黙祷の時間は、その場が一気に静まり返り、平和の鐘の音だけが鳴り響いていました。その場にいる人々の平和への思いが伝わってくるような感じがしました。

私はこの二日間を通し、「明日が当たり前にやってくることが平和である」と思いました。原爆が落とされ、来るはずだった明日を迎えることができなかった人々や、今起こっている戦争や紛争で毎日怯えながら過ごす人々。そんな人達がいなくなれば、平和だと言えると思います。そうするためには、戦争のことを他人事とせず、過去の過ちに学んで、その悲惨さを多くの人々に伝えていく必要があります。平和を望むのなら、ただ心の中で思っているだけでなく、行動に移していかないと平和はやってこないと思います。



川越市マスコットキャラクター

ときも

令和6年度 広島平和記念式典中学生派遣事業

報 告 書

令和6年11月

川越市 総務部 総務課 総務担当

〒350-8601 川越市元町1-3-1

Tel.049-224-5550(直通)